

G-07

「苦痛の連帯」のためのデモクラシー
—— 写真家・鄭周河（チョン・ジュハ）の福島写真を手がかりに
李 範根（東京大学大学院総合文化研究科 博士課程2年）

私の発表は、どのようにすれば他者の苦しみを想像し、それを自分の苦しみと重ね合わせることができるのか、という問いから出発しています。

発表の題材として用いるのは写真です。写真は特別な能力や訓練がなくても携わることができる表象形式であります。その意味においてデモクラシーと類似性があるといえます。写真のデモクラティックな性質を踏まえた上で、本発表では、韓国人の写真家・鄭周河（チョン・ジュハ）さんが撮影した福島写真を取り扱い、苦しみを想像し、重ね合わせるためのきっかけとして、「写真＝デモクラシー」のあり方を模索することを目標としました。

今、お見せしているんですが、このようにほとんどの写真は、福島的美しくてのどかな自然風景や日常的な風景をとらえたものです。原発事故によって、以前のような日常や風景が根本的に奪われているはずなのに、写真からみえるのは依然として変わらない福島の自然、日常風景なのです。このような現実と視覚表象の認識的なズレは、「見える＝知る」という認識作用を超えたところにある、根源的あるいは普遍的喪失と関係していると思います。こうした喪失という感覚の普遍性が、写真をみる人において、もし想像されるとしたら、その時写真は、他者の苦しみを情報として伝える単なる窓というよりは、他者と自分の境遇ですね、より直接的に重ね合わせることができるきっかけとなるのではないのでしょうか。

他者の苦しみを想像し重ね合わせるきっかけとしての写真デモクラシーは、このような想像的直接的に支えられることによって模索されるのではないかと考えています。

発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

「苦痛の連帯」のためのデモクラシー ——写真家・鄭周河の福島写真を手がかりに

イ・ボム・ホン
李範模
東京大学大学院 総合文化研究科
超域文化科学専攻 博士課程

● 発表目的

写真とデモクラシーは、いずれも特別な能力や資格を有していない者たち(demos)にも開かれている表象(representation)行為・形式である点において、親和性を持っている。写真のデモクラティクな性質を踏まえた上、本発表では、韓国写真家・鄭周河(1958~)が撮影した福島の写真に焦点を当て、苦しみを想像し重ね合わせる契機としての「写真=デモクラシー」のあり方を検討する

1. 問いの出発点——写真とデモクラシー

- 1) 他者の苦痛に関わること
: 限界(あるいは可能性)を指定すること
- 2) 「関わり方」としての写真とデモクラシー
: 特別な資格や能力を有していない者たちにも与えられるもの、開放性、匿名性、直接(間接)性
- 3) 写真における権力関係
: 写真が特別な資格を有していても携わることのできる営みであるとはいえ、それに関わる者たち——写真家・被写体・観る・論者には「権力-支配関係」が生じうる

2. 鄭周河の原発への関わりと写真表現

- 1) 韓国での原発への関わり
: 2003年より、韓国南部に集中している原発を撮影存在自体が自然なもの=日常風景と化した原発を表象→潜在的危機の喚起(危機の中にあること)
⇒「隠蔽された不安」の現前化(高橋智雄・後藤雄 2015, p.101)



鄭周河「不安、火中/A Pleasant Day」(Seoul: Noombi Publishing Co., 2008年より)

- 2) 日本での原発への関わり
: 東日本大震災の約8ヶ月後の2011年11月より、福島を撮影を開始。撮影された写真の多くは、福島の自然風景



鄭周河「奪われた野に春は来るか」(Seoul: Noombi Publishing Co., 2012年より)

3. 災難による苦しみをどう想像し表現するか

- 1) 方法としての普遍的な視覚、普遍的な感情
 - ① 視覚
「写真は非常に普遍的な視覚を維持しようとするため、現場が持つ弊害の姿は、なるべく避けようとする」(高橋智雄 2012, p.202)
* モチーフ: 美しく長閑な風景
* 見せ方(編集技法): 写真には文字情報無し
 - ② 感情
「私が見たのは、その秋と冬である。この時間を過ぎながら、「来づらいつ春」を待つ心情を依然として美しい自然の姿に込めようとしたのが、私の意図だ」(鄭周河 2012, p.263)
* 「喪失感」と「願望」という感情
: 李相和の詩「奪われる野にも春は来るか」(1928)
- 2) 根本的な変化と不変の間——断絶し後続するもの
: 「奪われたけれど、相変わらず美しい自然」(高橋智雄・後藤雄 2015, p.103)



鄭周河「奪われた野に春は来るか」(Seoul: Noombi Publishing Co., 2012年より)

- * 福島の「自然」や「日常」はなぜ奪われなければならないのか? 誰が奪ったのか?
- * 問題を提起し、苦しみを想像し重ね合わせる契機としての写真一語のための、何のための問題提起や苦しみののか
⇒ 間接的なものを、より直接的なものとする契機としての「写真=デモクラシー」(想像的直感性)

4. 写真を撮る、観る、論じる者の責任

- 1) 鄭周河における「関わり方」としての写真
: 写真に携われる個人々に委ねられる意味や感情の判断
- 2) 「苦痛の連帯」のための「写真=デモクラシー」
: 制度から疎外され孤立しがちな者同士が、表現(言語)を分ちし重ね合わせる

参考文献

- Bright, Deborah. "Of Mother Nature and Marlboro Men: An Inquiry into the Cultural Meaning of Landscape Photography." In Richard Belmont, ed., *The Cosmos of Meaning*. Cambridge, MA: The MIT Press, 1996.
- Soong, Susan. *Regarding the Pain of Others*. N.Y.: Farrar, Straus & Giroux, 2003.
- ランシエール, ジャック『民主主義への懐疑』松葉洋一訳、インスタリア、2008(2005)年

- 鄭周河「不安、火中/A Pleasant Day」(Seoul: Noombi Publishing Co., 2008年)
- 鄭周河「奪われた野に春は来るか」(Seoul: Noombi Publishing Co., 2012年)
- Richter, Daniel. "The Chemistry of Landscape and the Aesthetics of Invisibility." *Photography and Culture*, 21, 2014, pp.21-39.
- 高橋智雄・後藤雄編「奪われた野に春は来るか 鄭周河写真展の記録」(高文研, 2015年)
- 3・11 東日本大震災写真展実行委員会『あれから5年 3・11 東日本大震災写真展』(龍学社, 2016年)